



き上げていくアプローチを実施することで、学習動機を高めながら「自分の考えを述べる力」をつけることができか検証する。

## II 理論背景

### 2.1 新学習指導要領で求める「話す力」

2008年に公示された新学習指導要領には、第9節外国語の「言語活動－話すこと」に以下の目標が掲げられている。

- (イ) 自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えること。
- (ウ) 聞いたり読んだりしたことなどについて、問答したり意見を述べ合ったりなどすること
- (オ) 与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること。

しかし、上記の目標に照らしてみても、現時点で育っていない「話す力」は、①「自分の意見を理由をつけながら、筋道を立ててわかりやすく話す力」(→speaking logically)、②「聞き手を意識し、わかる英語を話す力(発音・間・抑揚)」(→delivery)、③「一方通行で終わらず、質問したり、それに答える等、会話を継続させる力」(→interpersonalcommunication)であることがわかった。

### 2.2 「インプット仮説」と「アウトプット仮説」

Krashenの「インプット仮説」とSwainの「アウトプット仮説」から、現在の筆者に足りないものをあぶり出した。英語＝外国語である以上は、インプットなしではアウトプットはできない。Krashenによると、『理解可能なインプット』を『情意フィルター』が低い状態で行えば、習得は必然となる」という。また、その時のインプットのレベルは“*i+1*”である。ただ、Krashenの言う「理解可能なインプット」を浴びせ続けるだけでは、ネイティブのようなアウトプットは期待できない。統語論的(語の配列等)ミスや、前置詞ミス、同音の動詞を誤って使う等のミスが出てくるからだ。頭では理解できても、イメージ通りのパフォーマンスができないと、イマージョン生徒も証言している。

### 2.3 「発話不安」とその解決策

「理解可能なインプット」を与えながら、アウトプットの機会をできるだけ与えることで、生徒達の話す能力を発展させられるのだ。しかし、生徒が気乗りして取り組む活動とはどんなものなのだろうか。Burgoonによって作られた言葉“Willingness To Communicate”について、MacIntyreはこう解釈する－<コミュニケーション不安のない状態＋能力認知を肯定できる状態で生まれるもの>。この“WTC”を出させるアプローチとして、Soresi(2005)の「SPMアプローチ」を採用してみる。できるだけ、多く話す回数を与えられ、生徒達を不安にさせない易しいゴールで、尚且つそれを達成することで、“WTC”が出てくると考えられるからだ。

### Ⅲ 検証

#### 3.1 第1期

まず、生徒の実態をつかむために、インタビューテストで実技面を、アンケートで意識面を調べてみた。そこからわかったことは、①単語レベルでレパートリーが少ない。②文が頭の中に浮かばないので、ぶつ切りの語・句をカタカナ英語で発音している。③ペアで練習がしたい。④自分の意見を言えるようになりたい。等であった。これらの状況を考えて、「SPM アプローチ」を採用した。この活動は、ペアワークによるスピーキング活動であるが、1回の活動でペアを変えながら3セット行える利点がある。毎回違ったトピックを提示し、30秒間で話させる。間違いは訂正しない。とにかく頭に浮かんでくることを発話させる。評価基準は「30秒間で何文話せたか」である。次セットでは前セットの文数を1文以上上回ればよい。ネイティブスピーカーが1分間で発話する文数が約20文というから、30秒で10文を目指させる。最初はおいそれとそんなに多くの文を発話できるはずもなく、「5文以上話そう」を目標とする。

第1期のテーマは① “What did you do last night?” と② “What did you do this morning?” であった。生徒達は嬉々として取り組んでいた。ペアが変わることが新鮮で、尚且つ1セット目より2セット目、そして3セット目と文数が増える喜びを、単純に味わえるからであった。

#### 3.2 第2期

第2期に入ると、第1期での喜びは次第に薄れ、成績の良い生徒達からは、「正しい文を話したい。」「もっと中身の伴った論理的な文を話したい。」といった意見が聞こえてきた。

第3・第4トピックは、③ “What are you going to do tonight?” と④ “Thing/ Person you like” であったが、第1・第2トピックとは異なり、特に第4トピックは、箇条書き文ではない、1つの内容に的を絞った内容で、理由をつける、詳細を述べる等、論理的に展開しなくてはならないものであった。

また、Soresi や磯田(2009)の実践例を参考に、タスク内容も1ランクアップしたものにした。聞き手は、パートナーの文数をカウントするのではなく、サマライズするというものである。このタスクを付け加えることで、「聞くこと」「相手に分かるように伝えること」を意識させることができたのだった。

#### 3.3 第3期

第3期では、第5・6トピックをそれぞれ、⑤ “Things you want to do in the future” と⑥ “What is Kanazawa/ Japan like?” とし、さらに、タスク内容もサマライズにコメントングを加えて臨ませた。

ところが、これまでの4週間では、期はまだ熟しておらず、トピックについて述べる段階から躓き始める生徒が出てきた。何と、成績が良い生徒でもである。ここで、再度30秒間に論理的に1つの物事について述べられるよう「マッピング」を取り入れ、生徒達が自信を持って発話できるよう指導時間をとった。

また、「話す意欲」についても、考えさせられた。MacIntyre, Dörnyei, Clément, Noels(1998)が言うように、「自信＝不安がない状態＋能力認知が肯定されている状態」の考え方に戻り、自信

を持って発話できる経験数をとにかく増やした。

#### IV 考察

SPM 活動に対するアンケートをとった結果、次のことがわかった。①スローラーナーへの配慮：SPM で文数が5文は言えるよう別途指導・支援が必要である。②サマライズ&コメンティングは、相当訓練しないと一朝一夕でできるようになるものではない。

また、最終インタビューテスト後の感想からは、仮説で立てた「SPM 活動を取り入れれば、発話不安は軽減しながら、発話技能が上がる」は成しえなかった。これは、テスト方法に問題があったようで、SPM で練習した友達とのペアワークから、いきなり ALT からのインタビュー「テスト」では、不安が軽減されるわけがなかったのだ。また、質問をされることで、「聞きとれなかったらどうしよう。」とか、「Why Question が怖い」などの意見も出てきた。上達したからこそ、「練習してきたのに、それが発揮できなかつたらどうしよう」という思いを持った生徒もいた。これに関しては、活動を重ねたからこそ出てきたい「1つレベルが上がった不安」であると言える。

#### V まとめ

SPM アプローチを利用すれば、50分の授業の冒頭10分程度で、話す機会を生徒に与えることができる。ペアワークを楽しみながら自分の話す内容をスムーズなスピードで話す練習と成り得る。今回は、たった6週間の取り組みであり、成果を見るには時期尚早であった。また、成果を図る方法は ALT によるインタビューテスト以外を実施すべきであった。

1年生の4月から3年かければ発話技能も上がると考えられる。また、自信さえつけば、ALT からのテストも、多少の緊張は免れなくとも、耐えられるはずだ。

短期間では、「自信をつけること」と「不安がないこと」は両立しないが、「努力による自信」が「不安」を超える時は来る。我々、日本の英語教師は、理解可能なインプットと、アウトプットの機会を与えつつ、生徒達が「自信」を持てるまで、経験させてあげなければならないのだ。